

ポスドクとしての研究生生活を通して思うこと

宮本英揮¹

福島の秋はよく冷える。11月初旬だというのに、眼前に聳える吾妻連峰は初冠雪。それでも、例年より1週間ほど遅いという。峰伝いに吹き降ろす秋風は冷たく、温暖な九州育ちの私には骨身にしみる。そんな吾妻連峰の山裾に位置する東北農業研究センター・福島拠点に、2009年6月からポスドクとして勤務している。ポスドク生活も5年目に突入し、勤務地も3箇所目ともなると、“ポスドクならでは”ともいえる局面に幾度となく遭遇し、考えさせられることも多かった。そこで、本稿では、私が体験した過去4年間のポスドク生活を紹介するとともに、それを振り返って思うことを述べてみたい。

私のポスドク生活の始まりは、2005年10月に遡る。この年、最少修業年数の倍近い5年半もの歳月を費やして、Na型粘土の理工学性をテーマとした博士論文を取りまとめた。苦勞の分だけ学位取得の喜びが大きかったかという点必ずしもそうではなく、自分の未熟さを痛切に思い知らされ、傷心の気持ちの方が強かった。そんな状況で「これからどうしようか？」と悩み抜いた末に、研究活動を継続する決意をした。「無謀な選択である」と、私の身を案じて諫める方もいたが、“やり遂げた”と満足するまで気の済まない性格が決断を後押ししたのである。そんなホロ苦い研究者デビューであった。

とはいえ、研究を継続するためには生活の糧が必要だ。今も昔も変わらず若手研究者が頭を抱えるのが、就職の問題である。当然、この問題は私の前にも仁王立ちした。他者より勝っていると自分自身ですら思えない私に、就職のあてなどあるはずもない。しかし、「世の中には、そんな私でも拾ってくれる方がいるかもしれない」と、かすかな希望を抱いてポスドクとしての受け入れ先を探し始めた。「たくさんの研究者にコンタクトすることが基本」という諸先輩方のアドバイスに従って、国内外の研究機関の研究者らにEメールで連絡をとることとした。

数通のEメールを送った矢先、九州大学生物環境調節センターから「受け入れ可」との返事を頂いた。何十通、いや何百通でもEメールを送信するつもりで臨んでいただけに少し拍子抜けしたが、九州大学のお世話になることを即決した。

九州大学では、閉鎖環境における作物栽培技術として注目を集める植物工場技術の開発を進める傍ら、土壌中の水分量および電気伝導度(EC)の同時計測法として

普及している時間領域反射法(TDR)の応用研究に取り組むことになった。TDRケーブルテスターの使い方を覚えることから始め、次第に高度な測定へと移行する過程で一つの問題に直面した。それは、ケーブルテスターを利用した従来のTDRを粘土に適用しても反射信号を得られないため、水分量を評価できないという問題である。TDRの使用を前提として粘土の理工学性に関する研究計画を立てていただけに、この問題には衝撃を受けた。「なぜ計測できないのだろうか？」という疑問で頭が一杯になった私は、TDRプローブの改良(Miyamoto et al., 2009)、粘土の誘電分光特性の解析(宮本ら, 2008b)、そしてTDRに代わる新たな手法として時間領域透過法(TDT)の開発(宮本ら, 2008a)に没頭した。

しかし、そうした研究生生活に終わりがあることが、ポスドクの宿命だ。試行錯誤の甲斐もあって、マイクロ波法に一筋の光明を見出した頃、残りの任期がわずかとなったのである。やり残したことを抱えた状態で、研究を中断して次の任地を探さなければならない辛さは、言葉では形容し難い。しかし、そうした未練を断ち切り、再びEメールによる受け入れ先探しを始めた。

次のポストは意外に早く見つかった。大学院時代の恩師から、「あてがある」との一報が届いたのである。勤務先は、私の母校でもある佐賀大学だ。災害弱者の防災・減災に関する理文融合型の研究プロジェクト(3ヵ年計画)が発足し、2年目からポスドクを採用できることになったという。「防災研究の素養がない私に務まるだろうか？」と悩んだが、恩師の言葉に甘えて佐賀大学にお世話になることにした。2008年5月のことであった。

佐賀大学では、防災研究プロジェクトの拠点がある文化教育学部・社会福祉学研究室の片隅に居候することになった。ターミナルケア、人生の質(QOL)、ジェンダーといった聞き馴れない福祉専門用語が飛び交う研究環境や、中山間地域における過疎・高齢化や介護保険施設の調査(北川・宮本, 2009; 宮本ら, 2009)、官公庁との折衝、地域交流、人材育成などの多様な業務を担ったことが、前任地との大きな違いであった。また、社会科学という当時の私にとって全く異質な研究環境や、勤務時間内は社会科学、勤務時間外は土壌学という多忙な研究生生活に慣れるまでに一定の時間を要した。しかし、「人」や「ソフト」を重視する社会科学的な物の見方・考え方に触れたり、学際的な取り組みに従事したりしたことで、「境界領域にこそ、研究対象が眠っている」ということを実感してからは、毎日が楽しかった。「軸足は土壌物理

¹ 明治大学 研究・知財戦略機構
2010年1月19日受稿 2010年1月22日受理
土壌の物理性 114号, 87-88 (2010)

学に置くが、片足はそこから半歩踏み出す研究スタイルが、私に合っている」と思え、目の前の視界がパッと開けた気がした。

しかし、プロジェクトは、衝撃の結末を迎えた。2008年度末で、プロジェクトの打ち切りが決まったのである。着任して数ヶ月しか経過していなかったし、次年度末まで職務を全うするつもりだっただけに、その知らせを聞いた瞬間、頭の中が真っ白になった。残す任期は1ヶ月。カレンダーをめくるたびに心細さが募っていったが、成果を取りまとめることに専念することで、心の中に渦巻く不安という濁流に、飲み込まれまいと努めた。

そうして、2009年4月に私は無職の身となった。行き場を失った私は、佐賀大学農学部出身研究室に身を寄せると同時に、最低限の収入を確保するためにハローワークに通い始めた。政府の緊急雇用・経済対策により、通常3ヶ月間の雇用保険給付期間が若干延びたことが折れかけた心の支えとなったが、この一件を通してポスドクという身分の不安定さを思い知らされた。

午前中は農学部で土壌研究、午後はハローワーク通いの生活が1ヶ月ほど過ぎたある日の夕方、携帯電話が鳴った。見知らぬ市外局番からの着信は、東北農業研究センターからであった。「近々、明治大学との共同研究プロジェクトでポスドクを募集するので、応募しないか?」というお誘いである。研究テーマは長年関心を寄せていた内容だったので、その場で応募することを決めた。生来の楽道家である私も、このときばかりはかつてないほど追い詰められていたので、感謝と安堵の気持ちで胸が一杯となった。

そうした経緯から、2009年6月より、東北農業研究センターで研究を行っている。私に与えられた課題は、明治大学炭素・窒素循環制御農業研究所が推進する研究プロジェクト「低炭素・窒素排出を目指した作物栽培技術の開発」の一環として、資源循環型農法による土壌内炭素・窒素貯留効果を検証することである。「2年もやれば、ちゃんと野菜を育てられるようになる」という共同研究者の言葉を信じて、雑草だらけの土地を耕起し、栽培試験圃場を作ることから始めた。室内研究に慣れてきた私にとって、フィールド研究は何をするにも初めて尽くしである。ハプニングの度に試行錯誤を繰り返す毎日であるが、前任地で学んだ“半歩踏み出す研究スタイル”がフィールドにおける農業技術開発に大いに役立っていることや、新たな共同研究者と新たな課題に挑戦できることに、深い喜びとやり甲斐を感じている。

以上が、ポスドクとしてのこれまでの4年間の軌跡である。私の研究生活は順風満帆どころか、ピンチの連続である。挫折や遠回りは日常茶飯事で、研究テーマも発散気味である。しかし、それでも無駄な経験など一つもなかったと思えるのは、この4年間の経験を通して、土壌物理学研究者としての方途が見えつつあることを、強く実感しているからであると思っている。学位論文の延長線上に留まっていたならば、こうした考えには決して至らなかつたであろうと容易に推測できる分、私にはこ

の4年間がなくてはならない期間であったと思えるのである。

その一方で、これまでに国内の研究機関に勤める数多くのポスドクに出会ったが、誰もが充実した研究生活を送れるわけではない。インターネット上で閲覧できる公募情報には、ポスドクに分類される人材公募が多数掲載されている。しかし、その職務内容や雇用形態は、ポスドクという一つの枠組みでひとくくりに出来ないほど多様である。それを知らずに安易に雇用契約を結んだ結果、思い描いた研究生活とかけ離れた現実に直面し、期待したような研究業績を挙げられずに苦しむポスドクを何度も見てきた。1つのポストをめぐる昨今の競争時代においては、ポスドクというポストは、若手研究者の一時的な受け皿として、また研究能力の涵養の場としての役割を持つ。そうした場で大きく飛躍するポスドクもいるが、その影には、先行きの見えない研究生活に疲弊し、研究への情熱を失いつつあるポスドクが存在するという事実を、読者の心に留めていただければ幸いである。

本稿では、ポスドクの研究生活の一例として、私自身の体験を紹介した。半分は、これから研究者を目指す方に“こんな例もある”ということを紹介するために、残りの半分は、ポスドクとしての生の声を届けるために書いたものである。本学会には、若手研究者の活躍の場を創出するために、寸暇を惜しんで若手ポストの創出のために膨大な労力を費やされている方が少なからずいる。現在の私にはこれといった将来展望はないものの、そうした方々の存在と支援が、何よりの励みである。研究者への道は長く過酷な面もあるが、ポスドクを経て研究者を目指す若手が、今後、そうした方々や志を共有できる仲間に出会い、有意義な研究生活を送ることができるよう心から願っている。

最後に、本稿の執筆機会を与えて下さった本誌編集委員会に感謝を申し上げ、本稿の結びとしたい。

引用文献

- 北川慶子, 宮本英揮 (2009): 佐賀県の地方都市における高齢者の防災意識と土砂災害リスクの啓発, 老年社会科学, 31(1), 3-11.
- Miyamoto H., Chikushi J., and Kanayama M. (2009): Coupled measurements of water content and electrical conductivity in dielectrically lossy clay slurry using a coated TDR probe. *Soils and Foundations*, 49(2): 175 - 180.
- 宮本英揮, 伊藤直樹, 安永円理子, 高市信也, 間瀬 淳, 筑紫二郎 (2008a): 広帯域インパルス信号を用いた時間領域透過法 (TDT) による誘電特性の計測, 土壌の物理性, 110: 3-12.
- 宮本英揮, 北川慶子, 甲本達也 (2009): 地域情報閲覧 Web サービスを利用した佐賀県における過疎・高齢化の地理的特性の評価, 農業農村工学会論文集, 262: 119-124.
- 宮本英揮, 下町多佳志, 筑紫二郎, 安永円理子 (2008b): マイクロ波信号領域における粘土の誘電特性, 土壌の物理性, 110: 13-23.